

税務職員

苦情、いやみ、時には怒声も。
 だが、彼等は黙々と働き蜂のように飛び廻る。大部分の良識ある納税者が心の味方だからだ。緑の下の力持ち—さしずめ税メンは、県政の台所を支える力持ちといえようか。



定期の軽油在庫調査および比重検査



新築家屋の調査。立派な家にフトラやましが



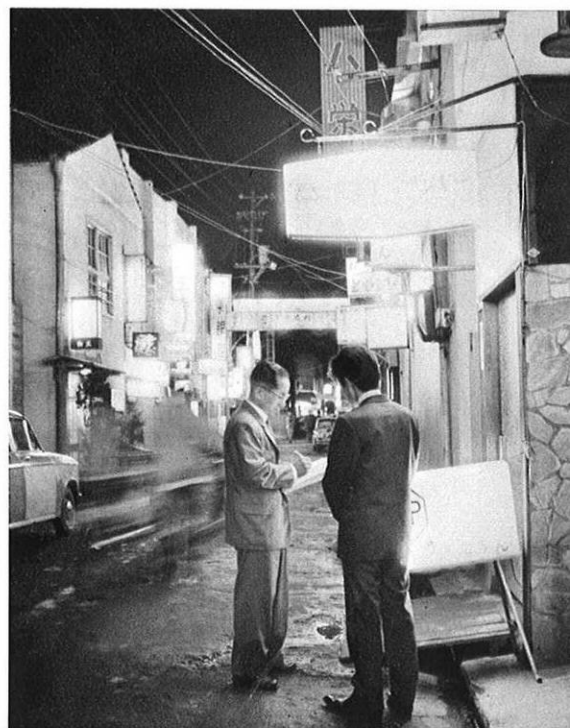
旅館は、ほとんど領収証完全交付だから調査もスムーズだ。



下・納税相談は、税の理解を深めるのに最も効果がある。



ある中小企業主から経営のきびしさをきかされる



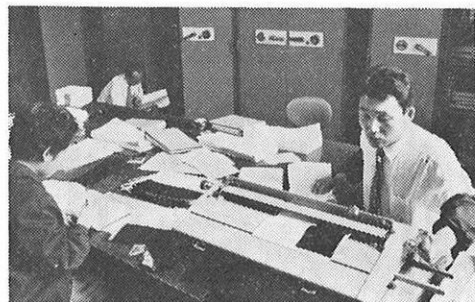
歓楽街も、楽しみとは緑の遠い仕事場
同僚と打合わせながら夜の街を……

〈第一線の人々〉

県税務職員

■県税収入を支えるもの

最近の税行政は、制度上あるいは取り扱ひ事務上からも、ひと頃の徴収する税金から、納める税金へと変わりつつあるといわれる。つまり、あくまで納税者に納得ずくで納めてもらうのが本当の姿だといわれ。しかし、税金と聞いてニコニコする人は、なかなかあるまいし、税金とは、イヤなものだ、とられるものだという感情は、おいそれとは抜けないであろう。それをニコニコ納めてもらうというのであるから、税務に携わる者、何とも骨の折れる仕事ではある。納期も過ぎたので、徴収に出かけていくと、一万円札で、「お釣がなければこの次来てくれ。」かと思うと、一円玉、十円玉だけで何千円かの納入。ゲンナリすることが今でも時々ある。しかし、これなどはまだ本当の税メンのつらさではない。やはり何と云っても「判ってもらえない」のが一番つらいのだ。課税にしても、徴収にしても、公正を期したい、正直者が馬鹿をみるようなことのないように、これだけを願っているのを。



告知書などの発行も自動計算器によって能率的に正確に行なわれている。

変わりつつある納税意識

昭和三十九年度予算は、総額約三百七十億円と決定した。やはり、国庫支出金と交付税とで才入予算の六九%を占めており、「三割自治」が顔を出した格好である。しかし、四十一億八千万円、十一%を占める県税収入は、自主財源のうち最も大きいウェイトをもつ。県の事業つまり住民の福祉のための仕事を実施する貴重な財源とあれば税メンの責任感をかち立てるのも、このあたりであろうか。今は間税を担当しているが、以前徴収の仕事もやったAさんは、もう経験十年のベテランだが、その頃と比べて「こころばらくの間に、ずい分事情も変りましたね。制度の面でも次第に整備されたこともあり、納税者側の経済

事情もよくなったせいもありますが、いわゆる徴収に血眼になることは少なくなったと思います。税金の本来の姿、つまり、納めてもらうんだということが、だんだん浸透してきたのでしようね。」という。

血のかよった税メンへ

「四、五年前までは、それこそ大晦日まで徴収して廻ったんです。私なんか、三十一日の夜に三十二軒廻った記憶があります。クリスマスだ、年末だと世間の人々が楽しんでるのを横目でにらんで、夜の繁華街を受け持たされたのをうらみに思ったもんだ。」が、今、直接徴収に出かけるのは、本当に悪質なものに限られると云っている。つまり、本当に理解してくれた人達は、申告も納入も、良心的に自分たちでやってくれるから、顔もよく覚えてはいないくらい。だから、よくよくの場合を除いては、出向いていくことはしない。それだけに、手ゴワイ相手も多いし、コワイ思いもさせられるが、税メンたちを勇気づけるのは、公平な、適正な税金をという願いと、横車に對する社会正義とでもいえるようか。

「私たちも、血のかよった税メンへ、というのを、日頃念じ続けているんです。何しろかけ引き上手の人たちとあまり接していると、だんだん意地の悪い人間になりわしいかと心配することもあるんです。」とAさんは笑うが、次のMさ

んのような話は、ほとんどの者が一度は経験することだという。ある家へ徴収にいったところ、いかにも貧困家庭で、ともかく税金だけは納めてもらったものの、たまりかねたMさんは子供の学用品代にでもと、いくばくかのポケットマネーを置いてきたというのだ。

もっと税金を

みつめてみよう

納税者に有利な制度のようなものはできるだけPRするようにというのは、一貫した県の方針だ。たとえば、新しく住宅を建てた場合、土地入手後一年以内に建築するものについては、不動産取得税の減免があるが、その基準が引き上げられ、百五十万円までは無税となったことなど、行った先々で説明すれば、ずい分喜ばれる。

また、県では、昭和三十四年から、公給領収証完全交付運動を行ってきており、効果も相当にあがってきている。しかし、まだまだ、完全交付とまではいかない。

今日も第一線の税メンが、適正な課税のための適正な資料を求めて、黙々と働いている。なかでも料理飲食税のような消費者の支払う税金が対象となるようなものなどは、もっと消費者自身が理解を深めるように願っているのである。

(Y)